

維摩經十喻と和歌

—— 釈教歌研究の基礎的作業（六） ——

国 枝 利 久

I

維摩經方便品には、人の身のはかなさを譬えた十喻が説かれている。

「是身如_レ聚沫_二不_レ可_レ撮摩。是身如_レ泡不_レ得_二久立。是身如_レ炎從_二渴愛_二生。是身如_レ芭蕉_二中無_レ有_レ堅。是身如_レ幻從_二顛倒_一起。是身如_レ夢為_二虚妄見。是身如_レ影從_二業縁_一現。是身如_レ響属_二諸因縁。是身如_レ浮雲_二須臾變滅。是身如_レ電念念不_レ住。」
〈維摩詰所説經・方便品第二〉^①

そして、これらの十喻を詠んだ釈教歌をまず勅撰集の釈教歌の世界にもとめ、それらを各集別・各譬喩別に整理して表示してみると次頁のようになる。^②

次頁の表から、次のことがまずいえよう。

⑦ 維摩經十喻を詠んだ作は、勅撰集の中では千載集に比較的多くみえる。

⑧ 十喻の中では、「是身如夢」の喩を詠んだ作が勅撰集にはやや多く採られている。

									後拾遺集
									千載集
									新古今集
									続古今集
									玉葉集
計	1	1	2	1	1	2	1	2	計

ただし、「此身如水中月」という喩は、前引・羅什訳維摩經方便品に説く十喩のうちにはみあたらずぬ喩である。こうしたところに維摩經十喩和歌研究上の一つの問題点がある。

II

私家集・百首歌等を調べてみても、維摩經十喩を詠んだ釈教歌はかなり認められる。そこで次に、それらの例を掲出してみる。^④

(A)

ゆいまゑの十のたとへ

維摩經十喩と和歌

ところで、勅撰集の釈教歌の世界にみえる十喩和歌のうち、後拾遺集や千載集には、「是身如水中月」という喩を詠んだ作がみえる。

同喩^⑤の中にこの身は水の月の如しといふ心をよめる

常ならぬ我が身は水の月なれば世に住みとげむことも覚えず

〈後拾遺・卷二十・雜六・小弁〉

維摩經十喩此身如水中月といへる心をよめる

すめば見ゆ濁ればかくる定めなき此の身や水に宿る月影

〈千載・卷十九・釈教・宮内卿永範〉

この身あはのことし

289[㊦]こゝに消えかしこに結ぶ水の淡のうき世にすめる身にこそ有けれ

此身水の月のことし

290 水の上にとれる夜半の月かけのすみとくへくもあらぬ我身を

此身かけろふのことし

291 夏の日のてらしもはてぬかけろふのあるかなきかの身とはしらすや

この身はせを葉のことし

292 風吹けはまつやふれぬる草のはによそふるからに袖を露けき

この身まほろしのことし

293 此身をはあともさためぬまほろしの世にある物は思ふへしやは

この身ゆめのことし

294 つねならぬこの身は夢の同じくはうからぬ事をみるよしもかな

この身かけのことし

295 世の中にわかある物と思ひしは鏡のうちの影にそ有ける

この身ひゝぎのことし

296 ありとぎくほとに聞えず成りぬれは身はひゝぎにも増らざりけり

この身雲のことし

297 さためなき身をうき雲にたとへつゝはてはそれにそ成りはてぬへき

この身いなひかりのことし

298 稲妻のてらすほとには出つるいきいつるまつまにかはらざりけり

(B)

維摩経十喻

この身はあつまれるありのことし^(ママ)

455 うきなから身にはたとへむ水のあはのためしにとしはきえぬへき哉

みつのあはのことし

456 雨ふれはみつにうかへるうたかたの久しからぬは我身なりけり

ほのほのことし

457 夏のよの火かけにまとふしかみればたゞみつからのことに有ける

はせをはのことし

458 秋風にくたへる草く敷のはをみてそ身のかたからぬことはしらるゝ

まほろしのことし

459 ゆめや夢うつゝやゆめと分かぬ哉いかなるよにかさめむとすらむ

かけのことし

460 水にうかふかけはなかにもあらぬともそれはありとはたのむへきかは

ひゝきのことし

461 いつまでかこゑもきこえむ山ひこのよろつにつけて物そかなしき

うかへる雲のことし

462 行多なく空にたゝよふうき雲にけふりをそへむ程そかなしき

いなつまのことし

463 いなつまのひとりとゝまる程みればわか身計の物にそありける

(C)

ゆいまきやうの十、たらす

いなつま

125 ありとてまたのみやはするいなつまのひかりのまにもきえぬへき身は

かけるふ

126 かけるふのあるかなきかにまかよふは我のほ(へま)とのこゝちこそすれ

まほろし

127 あさかほはひかけまつまもあるものをまほろしの世はなをそはかなき

かけ

128 たのむへきまことのみちをたつぬればかゝみのかけもむなしとそぎく
はせをは

129 あたにのみかせにやふるゝはせを葉をまたからぬよのためしとそみる

水のつき

130 いつまてかなみまにやとる月かけのさためなくてもすみわたるへき

うきくも

131 うきくものあたにみゆともたなひきてわれをゆけかしにしの方まで

この身あはのことし

132 いかにせむなかるゝとしのさためなくうかふみなはのきえやすき身を

ひゝき

133 あさゆふにおもひ(ママ)いつるはかなさをうちおとろかすかねのひゝきに

(D)

維摩經十喻之中ニ此身必聚沫

93 かはの瀬にをちあつまれるみつのあはのきえすはありとたのむへき身か

此身如夢

94 みるおりはゆめもゆめともしられねはうつゝをいまはうつゝとおもはし

維摩經十喻と和歌

〈風情集(公重)〉

(E)

釈教十

是身如聚沫

608 はやくゆくいはまの水のわくらはにうきてもめくるあはれよの中

是身如浮泡

609 にはたつみはかなくむすふうたかたのきゆるもよその袖のうへかは

是身如炎

610 はるの野にやくともえゆくわかくさのあはれをこめてたつ煙かな

是身如芭蕉

611 あひにあひてよを秋風のふきもあへすまつやふれぬる草のはもうし

是身如幻

612 世の中よなをあはれなりまほろしのうつりやすきはならひなれとも

是身如夢

613 むはたまの夢と見つゝもおとろかすなかきねふりにむすほゝれつゝ

是身如影

614 いとひかねうきは身にそふかけるふのあるかなきかのよをやたのまむ

是身如響

615 たに風のひゝきはかりを契にてきくもあやなきやまひこのこゑ

是身如雲

616 なかむれはむなしきそらをうきくものさすらへはてむゆくゑしらすも

是身如電

617 あきのたのはのうへてらすほともなしやみをはなれぬいなつまの影

〈明日香井集（雅経）〉

(F)

同二年六月十八日、武田大膳大夫信賢、来廿四日普光院の御仏事に、維摩結経十喩内すゝめられしに

是身如泡

5385 うき瀬にそおなし此身をよせてける瀧つ心のみつの白泡

〈草根集（正徹）〉

(G)

如空中雲、須臾散滅

風にちるありなし雲の大空にたゞよふほどやこのよ成らむ

〈法門百首（寂然）〉

右に掲出した例歌につき、若干の説明をこころみておく。

維摩経十喩と和歌

(A) 公任集の例の場合――

問題の「此身水の月のごとし」という譬喩の詠を含み、「是身如聚沫」という譬喩の詠を欠く。

(B) 赤染衛門集(流布本系)の例の場合――

⑦「維摩經十首」と題していながら、「夢のごとし」という譬喩の詠を欠き、実際は九首。異本系の場合もやはり「夢のごとし」という譬喩の詠を欠き九首。ただし、異本系・赤染衛門集では「まぼろしのごとし」という譬喩の詠が異なっている。

まぼろしのごとし

308まことにもあらぬこゝろのなせる身はなまぼろしのありとたのまし

〈異本系・赤染衛門集〉

⑧流布本系・赤染衛門集の「まぼろしのごとし」の詠は、その内容から推して「我身如夢」という譬喩を詠んだ作であろう。ところでこの詠、続詞花集や新古今集には、「此身如夢」(続詞花・卷十・釈教)・「維摩經十喩中に此身如夢といへる心を」(新古今・卷二十・釈教)と題してそれぞれ採られている。藤原清輔や新古今集の撰者たちは、赤染衛門集には「まぼろしのごとし」とあっても、歌の内容から「夢の如し」という譬喩を詠んだ作とみなし、そのように歌題を付してそれぞれの集に採ったものと考えられる。

もっとも、新古今集注釈書の多くは一例えば、「新古今和歌集増抄」(加藤盤斎)・「八代集抄」(北村季吟)・

「新古今和歌集詳解」(塩井正男)・「評釈新古今和歌集」(尾上八郎)・「千載集千載集釈教歌の研究」(間中富士子)・

「新古今和歌集全注解」(石田吉貞)・「新古今和歌集」(日本古典全書)・「新古今和歌集」(日本古典文学大系)

等はこのことについては触れていない。

さて、異本系・赤染衛門集の「まぼろしのごとし」と題する詠は、その内容からまさしく「まぼろしの如し」という譬喩を詠んだ作である。従って、異本系・赤染衛門集の「まぼろしのごとし」と題するこの詠を流布本系・赤染衛門集の維摩經十喩の作品に加え、流布本系・赤染衛門集の「まぼろしのごとし」と題する詠を「ゆめのごとし」の譬喩を詠んだ作とみなすならば、赤染衛門集に「維摩經十喩」の作が十首揃うことになるのである。石田吉貞氏が「新古今和歌集全注解」において、「赤染衛門集には十喩歌のすべてが載っている」と指摘しているのも、以上のようなことを吟味された上でのことであろうか。ともあれ、この問題については、なお今後慎重に検討してみたい。

(C) 風情集の例の場合――

題詞に「ゆいまきやうの十、たらず」と注されている如く、「如聚沫」・「如夢」の詠を欠き、問題の「如水中月」の詠へ風情集では「水のつき」と題しているを \sphericalangle を含んでいる。

(D) 禅林療葉集の例の場合――

禅林療葉集には「此身如聚沫」・「此身如夢」の二首がみえる。私家集大成の底本に「必聚沫」とあるのは、「如聚沫」を誤ったものか。

いうまでもなく、禅林療葉集は、賀茂重保の勸進に依って藤原資隆のまとめた百首歌である。資隆は維摩經の十喩をふまえて十首の作を詠みながらも、この百首には前掲の二首しか含めなかったものか、あるいは、維摩經十喩の作としてはこの二首しか詠まなかったものか――この点については明らかにしたい。

(E) 明日香井集の例の場合――

現存する和歌資料中、維摩経（羅什訳）に説く十喩を詠んだ作の十首ともにそろっている唯一の例である。

(F) 草根集の例の場合――

草根集は所収歌数一一二三七首に及ぶ老大な集であるにもかかわらず、維摩経十喩を詠んだ作は前掲の一首のみである。この他、正徹の歌集としては、招月正徹之詠歌（天理図書館蔵）・永享正徹詠草（大東急記念文庫蔵）・月草（陽明文庫蔵）等があるが、これらの集には維摩経十喩を詠んだ作はみられない。なお正徹は、永享四年に火災にあって、二十歳の頃より詠みおいた歌二万六・七千首をことごとく焼失してしまっている。これらの中に、あるいは十喩の詠が含まれていたかも知れない。

(G) 法門百首の例の場合――

法門百首の例歌（前掲）の歌題を維摩経（羅什訳）の本文と比べてみると多少異なっている。

「如空中雲 須臾散滅」（法門百首）

「是身如浮雲 須臾変滅」（維摩経）

しかし、歌題の右肩に「維摩」とその依拠した經典を注記していることやこの詠に対する釈文に「うき雲はあだにはかなき……」とあることから、維摩経十喩の詠とみることができよう。

なお、詞書や歌題に維摩経の十喩の作と明示されていなくとも、十喩を詠んだ作と考えられるものが、私撰集・私家集や百首歌の中に若干認められはする。そして、真鍋広濟・間中富士子両氏も次の詠をその例として指摘してられる。

水沫なす微き命も桺繩の千尋にもかと願ひ暮しつ

〈万葉集・卷五〉

ただし、万葉集の注釈書類―例えば、「万葉集私注」（土屋文明）・「万葉集全講」（武田祐吉）・「万葉集注釈」（沢瀉久孝）・万葉集（日本古典文学全集3、小島憲之他）等は、この詠を維摩経十喩をふまえた作であるとは指摘していない。さらにいえば、「万葉集」（日本古典文学大系）の注者も指摘している如く、妙法蓮華経・随喜功德品にも、「世皆不_ニ牢固_一」^{ナラザルコト}如_キ水沫泡焰_{コト}と説かれているので、真鍋・間中両氏の指摘される如く、「水沫なす」の詠を直ちに維摩経方便品に説くところの喩をふまえた作と速断してしまうことには問題があるろう。詞書等に、維摩経十喩の詠と明示されていない詠については、なお慎重に検討してみる必要があるろう。

III

宝物集を調べてみても、維摩経十喩について触れ、その例歌を引いているので、その箇所と例歌を次に掲出してみる。ただし、宝物集には、一巻本・二巻本・三巻本・六巻本・七巻本・九巻本等の諸本があるので、それらの諸本のおののから関係の箇所とその例歌を掲出してみる。

一類・一巻本

維摩経十喩ニモ　コノミウカヘル雲ノコトシ　芭蕉トイフ草ノコトシナムト侍ハ　タ、諸行無常　是生滅法　生
滅々已　寂滅為楽トオモハムヲモテ　仏法ノ宝ヲマウクルトハ　コ、ロウヘキナリ

〈書陵部藏・大日本仏教全書所収〉

二類・二巻本

又いはく ゆいまきやうの十ゆとて とをのたとへにも この身はみづにやどる月のごとく いなづまのごとく
ゆめのごとしなどゝ申たれば はやくしよぎやうむじやうをくはんじて ぶつぼうのたからとおもひたまふべき
なり されば ゆいまきやうのころを きのつらゆきがよめる

てにむすぶみづにやどれる月かげのあるかなきかの世にもすむかな

又 ごんのそうじやうやうゑんがうたに おなじきやうのころをよめる

ながきよのゆめのうちにてみるゆめにいづれかうつゝいかゞさだめん

されば しよぎやうむじやう ぜしやうめつぼう しやうめつ／＼い じやくめつゐらくとくはんぜん人は み
な仏法のたからをまうくるなり

〈築瀬一雄氏「碧冲洞叢書」第三輯所収〉

三類・平仮名古活字三卷本

又いはく ゆいまきやうの十ゆとて とをのたとへにも この身は水にやどる月のごとく「いなづまのごとく」

ゆめのごとし などゝ申たれば はやくしよぎやうむじやうをくわんじてぶつぼうのたからと思ひ給ふべきなり

されば ゆいまきやうのころをきのつらゆきがよめる

てにむすぶみづにやどれる月かげのあるかなきかのよにもすむかな

又ごんの僧正ゑいゑんがうたにきやうの心を「よめる」

ながき夜のゆめのうちにて見る夢はいづれかうつゝいかゞさだめん

されば しよぎやうむじやう ぜしやうめつぼう しやうめつめつい じやくめついらくとくわんぜん人は み

な仏法のたからをまふくるなり

〈上野図書館・静嘉堂文庫各蔵、古典文庫所収〉

四類・平仮名整版三卷本（正保版本）

本文は三類本にほぼ同じ。

〈大谷大学付属図書館等蔵〉

五類・片仮名三卷本

又維摩經ノ十喩ニモ 此身ハ水ニ宿レル月ノコトシ 電ノコトシ 芭蕉ノコトシナント申タレハ 諸行無常ナリト觀シテ 仏法ヲ宝ト思ヒ給ヘキナリ 維摩經ノ心ヲハ歌ニモ誦侍ヘリ

貫之

手ニ結フ水ニ宿レル月影ノ有ルカ無キカノ世ニモ任哉

源 重之

世ノ中ヲ何ニタトヘン秋ノ田ノ穂ノ上照スヨハノ稲妻
去ハ諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為樂ト觀セン人ハ 仏法ノ宝ヲ可儲也

〈続群書類従所収〉

六類・七卷本

又維摩經ノ十喩ニモ此身ハ水ニ宿レル月ノ如シ 電ノ如シ芭蕉ノ如シナンド申シタレバ 諸行無常ナリト觀シテ 仏法ヲ宝ト思ヒ給フベキ也 維摩經ノ心ヲ歌ニモ誦侍リ

維摩經十喩と和歌

手ニ結ブ水ニ宿レル月影ノ有カ無カノ世ニモ在哉

貫之

世間ヲ何ニ譬ン秋ノ田ノ穂ノ上照ス夜半ノ稲妻

源 重之

長夜ノ夢ノ中ニテ見ル夢ハ何カ現イカニ定メン

権僧正永縁

サレバ諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為樂ト觀ゼン人ハ 皆仏法ノ宝ヲ儲ベキ也

〔元禄六年刊本・大谷大学付属図書館蔵、大日本仏教全書所収〕

七類・九巻本

又、維摩經の十喩にも 此身水にやどる月のごとし 芭蕉のごとし 夢のごとし など申たれば 諸行を空と

觀じて 仏法を宝とおぼすべき也 維摩經の十喩の心 むかし今の歌にもよみて侍るめり 少々申べきなり

紀 貫之

手に結ぶ水にやどれる月影のあるか無かの世にも住かな

源 順

世の中を何にたとへん秋の田のほのうへてらす宵の稲妻

大納言公任

風吹ばまづ破ぬる草の葉のたとふるからに袖ぞ露けき

権僧正永縁

長き夜の夢の中にて見る夢は何れうつゝといかゞ定めん

源 仲綱

浅茅原末葉にすがる露の身にもとの雪をよそにやはみる

されば 諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為楽 と観ぜし人 仏法の宝をまうくるもの也

〈吉田幸一氏蔵・古典文庫所収〉

さて、右に掲出したところからあきらかな如く、一卷本を除く宝物集の諸本では、「維摩経の十喩として（にも）」此の身は水に宿れる月の如く（如し）」と説き、またその例歌として、貫之の「手に結ぶ」の詠を引きもしているのである。即ち、一卷本を除く宝物集諸本の編者は、羅什訳・維摩経に説く十喩にはみあたらない「如水中月」という喩を維摩経十喩のうちの一喩として説き、貫之の詠をその例歌として引きもしているのである。また、諸本によって、十喩の例歌にも出入りが認められる。そこで念のため、以上のことを次に表示してみる。

		十喩にも此身は水に宿れる月の如く	例歌
一類		ナシ	ナシ
二類	○		手にむすぶ（貫之） 長き夜の（永録）
三類	○		〃
四類	○		〃
五類	○		手にむすぶ（貫之） 世の中を（源重之） 手にむすぶ（貫之）

ところで、問題の貫之の「手にむすぶ」の詠は、貫之集巻九（正保版系）にもみえ、拾遺集（巻二十・哀傷）にも採られている詠であるが、貫之集や拾遺集の詞書には、維摩経の十喩を詠んだものであるというようなことはしるされていないのである。

世中心ほそくつねの心ちもせさりければ、みなもとのきんたゝのあそんのもとに此うたをやりける、このあひたやまひをもく成にけり

〈貫之集の詞書〉

六 類	○	世の中を（重之） 長き夜の（永縁）
七 類	○	手にむすぶ（貫之） 世の中を（源順） 風吹けば（公任） 長き夜の（永縁） 浅茅原（仲綱）

世の中心細くおぼえて、常ならぬ心地し侍りければ、公忠朝臣のもとにのみて遣はしける、このあひだ病おもくなりにけり
 〈拾遺集の詞書〉

さらにいえば、十諭の例歌中「世の中を」の詠を宝物集諸本中片仮名三卷本や七卷本では源重之の詠としてゐるが、重之集にみえず、源順集にみえる作である。

重之の詠とするのは誤り。しかも、源順集のこの詠の詞書には、維摩経十諭をふまえて詠んだというようなことは記されていない^⑧。また、永縁の「長き夜の」の詠も仲綱の「浅茅原」の詠も、その詞書や歌題による限りでは、維摩経十諭を詠んだ作とはどうも認めがたいのである^⑨。

宝物集に引かれている例歌につき以上の如く吟味してみると、一卷本をのぞく宝物集の諸本に、維摩経十諭の例歌として引かれている作は、必ずしも適切であるとは言いがたい。宝物集の編者は、それらの詠を維摩経十諭の側にいちぢるしくひきつけて解釈しうけとめた上で、その例歌として掲げているように考えられるのである。とすれば、宝物集編者が、維摩経十諭の中に「如水中月」という諭の説かれていることを確かめた上で説いたかどうかということも、また問題になってきよう。

IV

釈教歌の世界には、維摩経十諭のうちの一諭として「如水中月」という諭を詠じた作が認められた。また、一卷

本を除く宝物集の諸本にも、「如水中月」という喩が維摩經十喩のうちの一喩として説かれ、その例歌も引かれているのである。茲に維摩經十喩和歌並びに宝物集研究上の一つの問題点があるといえよう。そこで、この問題につき、次に吟味してみる。

まず永範の「すめばみゆ」（千載集）の詠に対する北村季吟の注釈を次に掲げてみる。

「此身如水中月―此文後拾遺にも有。維摩經方便品の十喩には見えず。同經觀察品の十喩に如_ミ智者見_ニ水中月と有て、此身はといふ事なし。彼經、異本などある歟、可勘之」（八代集抄）

右に掲げた注釈について少し言及しておく。

①季吟は、「同經觀察品の十喩に如智者見水中月と有て云々」と注してはいるが、「觀察品の十喩」とは「觀衆生品の三十喩に」の誤りであろう。維摩經觀衆生品第七に説かれている三十喩の中に「如智者見水中月」という喩がみえる。

爾時文珠師利問_ニ維摩詰_一言。菩薩云何觀_ニ於衆生_一。維摩詰言。譬如_ニ幻師見_ニ所幻人_一。菩薩觀_ニ衆生_一為若_レ此。如_ニ智者見_ニ水中月_一。如_ニ鏡中見_ニ其面像_一

〔羅什訳・維摩經觀衆生品第七〕

②また季吟は「彼經異本などある歟」とも注しているが、このことにつき吟味してみる。

・維摩經の訳としては七訳あったといわれているが、現存するものは次の三訳である。

①姚秦 鳩摩羅什訳

②呉 支謙訳

③唐 玄奘訳

そこで、念のため、支謙訳維摩経・玄奘訳維摩経の問題の箇所を調べてみても、「如水中月」という喩はみあたらない。

是身如聚沫澡浴強忍。是身如泡不得久立。是身如野馬渴愛疲勞。是身如芭蕉中無有堅。是身如幻轉受報。是身如夢其現恍惚。是身如影行照而現。是身如響因緣變失。是身如霧意無靜相。是身如電為分散法。

〔支謙訳・維摩詰所説経善権品第二〕

是身如聚沫不_レ可_レ撮摩。是身如浮泡不_レ得_レ久立。是身如陽焰從_レ諸煩惱渴愛所_レ生。是身如芭蕉都無_レ有_レ實。是身如幻從_レ顛倒起。是身如夢為_レ虛妄見。是身如影從_レ業緣_レ現。是身如響屬_レ諸因緣。是身如雲須臾變滅。是身如電念念不_レ住。

〔玄奘訳・説無垢称経頭不思議方便善巧品第二〕

長尾雅人氏は、「大乘仏典7・維摩経・首楞嚴三昧経」に維摩経のチベット訳を紹介していられるが、この訳の問題の箇所にも「如水中月」という喩はみあたらない。

・漢魏六朝百三名家集^⑧へ七十二冊の三十八冊目の謝康楽集卷一賛の部に、維摩経十譬賛の詩がみえる。その詩の題を調べてみると、「聚沫泡」以下の十題で、羅什訳・維摩経方便品の十喩と全く一致している。その当時、羅什訳の流布していたことがわかる。

以上のことから、現在のところ、維摩経方便品に「是身如水中月」という喩を説く異本が存在したとは考え難く、我が国においても、おそらく羅什訳が流布していたのであろう。

次に小舟の「常ならぬ」（後拾遺集）の詠に対する「釈教歌詠全集」（第四卷）の注釈を掲げてみる。

「般若経の十喩には水中月あれど維摩経にはなし。是身如影と云ふを水中の月として味_{（ア、イ）}めるならん」

「釈教歌詠全集」の注者の指摘するごとく、般若経の經典にはたしかに「如水中月」という喩が説かれている。

解了諸法「如幻如焰如水中月」如虚空如響如捷闍婆城「如夢如影如鏡中像」如化

〈摩訶般若波羅蜜經卷第一〉^①

多俱胝劫巧説無尽。於諸法門勝解觀察。如幻如陽焰如夢如水月。如響如空花。如像如光影。如變化事。知尋香城

〈大般若波羅蜜多經卷第一〉^②

「釈教歌詠全集」の注者は「般若経の十喩には云々」と注釈しているところから、摩訶般若波羅蜜經にその喩のみえることを指摘しているのである。ただし、公任の維摩経十喩の作品には「是身如水中月」の喩を詠んだ作も、「是身如影」の喩を詠んだ作もみえるので、「是身如影と云ふを水中の月として咏めるならん」という注釈は首肯しがたいようにも思われる。

なお、静嘉堂文庫蔵の後拾遺集・千載集^③や三手文庫蔵の後拾遺集・千載集^④の各伝本にはまま書きこみや注が認められるが、問題の小弁や永範の詠に対しては注も書きこみもない。

以上、「此身如水中月」という喩を詠んだ作に対する従来の注釈を吟味してみたのである。しかしながら、そうした作業のみからは、中古・中世の歌人たちが、どうして「是身如水中月」という喩を維摩経十喩の一喩として詠みあげたのか、またどうして宝物集にもそうした喩が引かれているのか——このことについてあきらかにすることはできないのである。

V

以上吟味してきたところの維摩經十喻和歌並びに宝物集の研究上の問題点につき、若干の私見を述べてみる。

「此身如水中月」という喩は、羅什訳維摩經弟子品・同觀衆生品（前掲）・同菩薩行品にもみえる。

一切法生滅不_レ住。如_レ幻如_レ電諸法不_レ相待。乃至一念不_レ住。諸法皆妄見。如_レ夢如_レ炎如_レ水中月。如_レ鏡中像。
以_三妄想_一生。
(弟子品第三)

有_下以_三夢幻影響鏡中像水中月熱時炎如_レ是等喩_一而作_中仏事_上。
(菩薩行品第十一)

維摩經弟子品その他にみえるこの喩を、公任あたりが迂闊にも方便品の十喻に含まれているものと思ひ誤つて、そうした作を詠みあげてしまったのではあるまいか。そして、公任の「是身如水中月」という喩を含む十喻和歌が、その後十喻和歌を詠みあげてゆく場合の一つの先蹤ともなったのではあるまいか。

しかしながら、次のように考えることもできよう。

境野黄洋氏は「維摩經講義」において、「沫はあわで、泡もあわである。泡沫は手にとることも摩擦することも出来ない」と注釈していられる。普通には、聚沫といえは岩角にとびちる水しぶきを想いうかべ、泡といえは水上に消えてはうかぶあわを想いうかべよう。とはいえ、ともに手にとることはできないもので、見方によつては同じような素材である。また、「仮合の身は滅びやすく、泡沫の命は駐め難し」(万葉集・巻五)・「況や下界泡沫の質に於てをや、不定短命の州に於てをや」(源平盛衰記・四十)というふうには、「泡」と「沫」とを合してはかない喩に用いられる場合も多いのである。したがって、「如聚沫」・「如泡」という喩をそれぞれに詠みわけるといふこ

とは、歌人たちに時としてとまどいの念を抱かせたかも知れない。謝康楽集においても、「聚沫」と「泡」とを合して一首の詩を詠じているのである。

公任あたりも、意識的に「是身如聚沫」の喩を詠むことを避け、そのかわりに「観衆生品」その他にみえる「水中月」という喩を詠みあげて十喩に加えたのではあるまいか。

そもそも中古和歌の世界を調べてみると、後撰・拾遺・後拾遺らの集には水面に宿る月かげを詠んだ叙景歌が多く認められる。述懐的な立場から水面に宿る月を詠んだ作もまた認められる。それらの例を次に掲げてみる。

秋の歌とよめる

秋の海にうつれる月をたちかへり波はあらへどいろもかはらず

〈後撰・秋中・深養父〉

水に月のやどりて侍けるを

秋の月波のそこにぞいでにけるまつらんやまのかひやなからむ

〈拾遺・秋・能宣〉

賀陽院におはしましける時、石たて漣おとしなどして御覧じける比、九月十三夜になりければ

岩まよりながるゝ水ははやけれどうつれる月の影ぞのどけき

〈後拾遺・雑一・後冷泉院〉

廉義公後院にすみ侍ける時、歌よみ侍ける人々めしあつめて、水上秋月といふ題をよませ侍けるに

みなそこにやどる月だにかべるをしづむやなにのみくづなるらむ

〈拾遺・雑上・左大将濟時〉

水のおもに月のしづむをみざりせばわれひとりやおおもひはてまし

〈同・式部大輔文時〉

即ち、中古和歌の世界においては、「水中月」はしばしばとりあげられた素材であったのである。

ところで、公任に先立ち、菅原道真や大江朝綱らは、この「水中月」を、仏教的な深まりのもとにとらえて詠み

あげているのである。

晩望^三東山遠寺^一

秋日閑に反照に因りて看る

華堂 挿みて白雲の端に著けたり

微微に寄せ送る 鐘の風響

略略分張す 塔の露盤

香花は親ら供養すること得ず

偏に水月を將ちて苦に空觀す

仏は來ることなく去ぬることなく 前も後もなし

ただ願はくは我が障難を拔除したまはむことを

無常

秋の月の波の中の影を觀ずといへども ⑧ ⑨
いまだ春の花の夢の裏の名を遁れず
〈和漢朗詠集・卷下・大江朝綱〉

しかも公任は、前掲大江朝綱の詩を和漢朗詠集に採りあげてもいるのである。

また、「如水中月」という喩を、大正藏經によつて探索してみると、維摩經・般若經以外の諸經——例えば、大

乗生心地觀經・放光般若經・勝天王般若波羅蜜經・大方等夢想經・仏説象頭精舍經・大乘伽耶山頂經・大毘盧遮

那成仏神變加持經等々にもみることができるのである。⑩ 従つて、「如水中月」という譬喩は当時の教養人たちの間

に広く滲透していたものと考えられる。

〈菅家後集〉^⑩

このように、中古和歌の世界においては、「水中月」が恰好の素材であったこと、公任よりも先輩の詩人がその素材（水中月）を仏教的立場からとらえて詠みあげていること、維摩経以外の諸経典にも「如水中月」という喩は随所にみることができ、その喩は広く滲透していたのではあるまいか——ということどもを十分考慮しながら、公任の「是身如水中月」という詠を私どもはうけとめる必要がある。

以上の如く考えてみると、公任は維摩経の十喩を經典に説くところに拠って正確に詠みあげたとは考えがたい。恐らく公任にとつて、釈教歌を詠むということは、また、別な意味があつたのではあるまいか。

公任は、和漢朗詠集（卷下）に

願はくは今生世俗の文字の業、狂言綺語の誤りをもつて、翻して当来世々讚仏乗の因、転法輪の縁とせむ
という詩を採っているが、公任が釈教歌を詠みあげることとまたこうした希いにつながるものではなかつただろうか。

いつの世においても、人の身ははかない。その故に、維摩経方便品に説く十喩も人々の胸奥にひびき、いっそり無常の念をかきたて、彼岸へのあこがれの念を燃やさせたに違いない。

また、今生世俗の文字、狂言綺語を以つてさえも讚仏乗の因・転法輪の縁になるものと考えられていたのである。ましてや經典類に説くところの一句一偈を歌題として釈教歌を詠みあげた場合のいっそりの功德を、ひとり公任のみならず、文学の担い手たちは信じて疑わなかつたのであらう。その場合、經典類に説くところとその字句が多少異なっていたとしても、もはや問題でなかつたのではあるまいか。

釈教歌の研究においては、文学の担い手たちがどのような詠歌意識をもって維摩経十喩の歌を詠みあげ、またそ

これらの詠をどのような意識でもって享けとめようとしていたかを、なお慎重に検討・吟味して見る必要のあることを茲に確認せねばならないのである。

註

- ① 大正藏經第十四卷所取。
- ② 真鍋広濟氏も「歌詠と經典」〈龍谷大学論集、昭27・12〉において、二十一代集中に維摩經十喻和歌の十一首認められることを指摘していられる。また岡崎知子氏も「釈教歌考」〈仏教文学研究(一)〉において、八代集中に十喻和歌の八首認められることを指摘していられる。なお、間中富士子氏は「国文学に撰取された仏教」(上代・中古篇)の第八章において、千載集に維摩經十喻和歌が三首みえるとしていられるが、「是身如水中月」の詠を対象外としても、一首見落していられることになる。
- ③ この詠の前にみえる「維摩經の十喻の中にこの身は芭蕉のごとしといふ心をよめる」という詞書きをうけて同喻としていらる。
- ④ 例歌の掲出にあたっては、私家集の例は私家集大成本に、百首歌の例は類従本にそれぞれ拠った。なお、詞書等にあきらかに維摩經十喻の詠と明示されているもののみを掲出した。
- ⑤ 私家集大成において、各集ごとに付してある通し番号。
- ⑥ 「新古今和歌集全注解」の「夢やゆめ」に対する「釈」参照。
- ⑦ 前掲「歌詠と經典」および「国文学に撰取された仏教」(上代・中古篇)参照。
- ⑧ 応和元年七月十一日に、よつなる女子をうしなひつ、おなしとしの八月六日に又いつつなる女子をうしなひつ、無常のおもひ事にふれておこる、かなしひの涙かはかす、古万葉集のさみませいかよみける歌のなかに、世中をなにくたたとへんといへることはをとりて、かしらにをきてよめる歌十首

よのなかをなにくたとへむあきの田をほのかにてらすよひのいなつま 〈順集〉

⑨ 夢

ながき夜の夢の中にてみる夢はいづれうつゝといかで定めむ 〈堀河院御時百首和歌・雜・少僧都永縁〉

題しらず

浅茅原未葉にすがる露の身は本の雫をよそにやは見る　〈新後拾遺集・第十七・雜下・源仲綱〉

⑩ いずれも大正蔵経十四卷所収。

⑪ 京大人文科学研究所・仏教大学付属図書館等蔵。

⑫ もっとも、智證大師(円珍)の「請求目錄」(大正蔵経五十五卷所収)に依れば支謙訳も我が国に伝わったらしい。

⑬ 大正蔵経第八卷所収。

⑭ 大正蔵経第八卷所収。

⑮ 整理番号五一九・五六・二二一〇一。

⑯ 函架番号午

⑰ 日本古典文学大系本の注者は、水月について、大乘十喩の一と注し、智度論六の「諸法を解了すれば、幻の如く、焰の如く、水中の月の如く(中略)鏡中の像の如し」の部分を引きいられる。大智度論は摩訶般若波羅蜜經の注釈書である。当然摩訶般若波羅蜜經にもその文はみえる。

⑱ 日本古典文学大系本の注者は、この詩、維摩經弟子品の「一念住まらざれば、諸法みな妄りに見ゆ、夢の如し餓の如し、水中の月の如し、鏡中の像の如し」をふまえたものであるとしていられる。

⑲ 「智慧如_レ空無_レ有_レ辺 応_レ物現_レ形如_二水月_一」(大乘本生心地觀經卷第一)

「如幻如夢如響如光如影如化。如水中泡如鏡中像。如熱時炎如水中月」(放光般若經卷第二)

「応以如夢水中月如影如響皆亦如是」(勝天王般若波羅蜜經卷第四)

「一切衆生亦如虚空水月夢幻芭蕉雲電」(大方等無想經卷第六)

「住如鏡像如空谷響如水中月如熱時焰」(仏説象頭精舍經)

「趣於如鏡中像如光中影如水中月如熱時焰」(大乘伽耶山頂經)

「云何為十。謂如幻陽焰夢影乾闥婆城響水月浮泡虚空華旋火輪」(大毘盧遮那成仏神變加持經卷第二)

⑳ 拙稿「天台五時八教と和歌」〈谷山茂教授退職記念国語国文論集〉参照。

〈付記〉

本稿は、昭和五十四年春季仏教文学会（於・鶴見大学）において発表したところを、一部補訂してまとめたものである。当日御教示をいただいた石田瑞敏氏らの各氏並に貴重な資料の閲覧にあたり御高配をいただいた大谷大学の山本唯一氏にあつく謝意を申し添える次第である。